

# The Standard



Volume 3

Alvar Aalto's  
Hand Grenade and  
four other highlights from Artek

**artek**



光あふれるアアルトスタジオのオフィスにたたずむアルヴァ・アアルトの「スツール 60」。ヘルシンキにあるこのスタジオは、1955年、アアルトにより設計されました。

# Standards and Systems

家具部品の豊かなスタンダード化

## モダニズムに基づき開発され アルテックの家具デザインの礎となった 曲げ木の技術「L-レッグ」とその応用

世界中の国々でモダニズム運動が沸き起こった1920年代、フィンランド国内にも工業化の波が押し寄せていました。アルヴァ・アアルトは、当時独立からまだ日が浅いフィンランドにとって、建築とデザインが国の揺るぎないアイデンティティの形成と国際的な経済的地盤を築く上で大きな役割を果たすと信じていました。アアルトは家具を大量生産するためには、合理的な家具部品のスタンダード化と新たな技術が必要であると考え、1929年よりフィンランド南西部のトゥルク郊外の工場で、家具職人オット・コルホネンとともにフィンランド国内の自然素材を用いた曲げ木の技術の開発に注力するようになります。

その結果生まれた「L-レッグ」という強固な無垢材を直角に曲げる技術は、1933年に特許を取得、その後、様々な製品に応用され、アルテックの家具デザインの基礎を築きました。このL-レッグを用いた最初の製品である「スツール 60」(※1)を発売してからほどなく、4つのサイズのL-レッグが製造され、スツール、チェア、テーブル、収納家具まで、50を超える製品への応用が可能になりました。アアルトはL-レッグのことを「建築における柱の弟分」と呼んでいました。それは、テーブルの天板やスツール、椅子の座面など、家具の平らな面を垂直に支えるL-レッグと、建築を支える柱は共通するものと考えていたからです。1960年代以

降、高圧力を加えるための機械を導入しながらも、今もなお、L-レッグは多くの工程において人の手によるクラフトマンシップを経て製造されています。

アルテックの製品は手作業による一点ものではなく、工場で製造される量産品です。しかし、機械による完全にオートメーション化された工程ではなく、素材の選定や細かい仕上げには必ず職人が携わっています。素材や製造工程から生じる製品ごとのわずかな違いは、アルテック製品の個性であると考えています。

アアルトは、部品のスタンダード化を推し進める一方で、その方法が家具デザインの自由さと多様性を妨げるべきではないと考えていました。彼はこの考え方を「柔軟なスタンダード化」(※2)と呼んでいました。自然界の中に存在する造形から着想を得ていたアアルトは次のように語っています。

「自然を構成する最小単位である細胞、この細胞の一つひとつは例外なく見事に規格化され、自然界はその数百万の組み合わせにより成り立っています。つまり、自然は合理的なスタンダード化の最高傑作とも言えるでしょう。同時に、自然は、生物の成長の過程で絶え間なく繰り返される有機的な営みによる無限の豊かさを持ち合わせています。建築や家具における部品のスタンダード化もそうあるべきだと私は考えているのです」





白く塗られたアルテックの「スツール 60」、「153B ベンチ」、「66 チェア」。アルヴァ・アアルトによるアルテックの様々な家具に「L-レッグ」が部品として応用されています。







バーチ材を削り出すことにより、プラスチックのような滑らかな脚に仕上げた「KG001 ライバル チェア」。オフィスやレストランなどに最適な背もたれ付きの「KG002 ライバル チェア」、2種類から選ぶことができます。

# The Rival Chair by Konstantin Grcic

ライバル チェア

## グルッチによる 滑らかなフォルムと機能を備えた 木製の回転式チェア

コンスタンチン・グルッチとアルテックが初めてコラボレーションを果たした製品「ライバル チェア」。ライバルチェアは、家族とにぎやかに食卓を囲む時、一人でパソコンに向かう時、夜更けに親しい友人と静かにグラスを傾ける時など、生活のあらゆるシーンで使うことができます。同時に、オフィスや公共施設、レストラン、カフェなどの空間に、1脚で使用する場合からその空間全てをライバルチェアで揃える場合まで、どんな場面にも違和感なく馴染むタスクチェアでもあります。つまり、ライバルチェアは、現代社会において、仕事と生活そして公的空間とプライベート空間の垣根を取り払うことに挑んだ意欲作といえるでしょう。グルッチはアルテックの伝統を受け継ぎながらも、木製の椅子の更なる可能性を追求しました。脚には無垢のバーチ材を削り出すことによって、あたかもプラスチックのような滑らかなフォルムを実現しました。バックレストとアームレストには、板の木目を同一方向に重ね合わせ成形する「ラメラ曲げ木」というアルヴァ・アアルトの製品に見られる伝統的な技術が使われています。このように、椅子を構成するそれぞれの要素にはアルテックの哲学と技術が息づいています。

アルテックのコレクションの中では珍しい回転式チェアであるライバルチェアには、素材とテクノロジーに対して挑戦し続けるグルッチならではの魅力が詰まっています。彼は、回転機能を前面に押しだすのではなく、ライバルチェアの座面下にポリプロピレン製のボウルをデザインし、その中にアルミニウム製の回転機能を隠してしまいました。従来のオフィスチェア(※3)とは一線を画すそのデザインは、ダイニングチェアとしてもタスクチェアとしても使用でき、オフィスの机にも、家庭の食卓にも、レストランのコーディネイトにもすんなりと溶け込む革新的なものです。ライバルチェアからは、歴史や伝統を尊重しながらも、「人が使う」ことを大切に考えているグルッチの信念が感じられます。ライバルチェアはアルテックとアルヴァ・アアルトの歴史と伝統に強く根差したものですが、ライバルという名前は競争という意味ではなく、アルテックを象徴する数々の名作家具といずれ肩を並べる椅子になる、というグルッチの自信を表しています。

# Alvar Aalto's Pendant Light A110

A110 ペンダント 手榴弾

## 無駄のないフォルムと存在感 光の輪から柔らかな光を放つ 美しき手榴弾

光と照明は、アルヴァ・アアルトの建築、インテリアや家具を語る上で欠かすことのできない要素の一つです。アアルトの建築において、自然光と人工の照明の明かりが相互に戯れるように作用することは極めて重要なことでした。特に太陽の光が弱く暗い冬が長いフィンランドでは、たとえ人工の光であったとしても、光には人と人との距離を縮め、癒しを与える効果があるとアアルトは考えていました。アアルトにとって照明は単なる明かりではなく、彼が理想とするヒューマニズム哲学を表現するための手段でもあったのです。

アアルトは、照明の光が人の心に与える心理学的効果だけでなく、造形的な美しさも大切にしていました。照明は明かりが灯っている時も消えている時も美しくなければならない、彼はそう考えていました。アアルトのデザインした照明は明かりのあるなしに関わらず、まるで彫刻のような美しさと存在感があります。また、1955年には、ヘルシンキのスタジオ(※4)の一面に自身でデザインした照明の実験を行うための専用スペースを作り、プロトタイプを室内の小さなバルコニーのあらゆる位置から吊り下げて検証を繰り返していました。その度重なる試行錯誤の中、照明の明かりがで

きる限り間接的で柔らかくなるように、アアルトはさまざまな工夫を施しました。それがアアルトの照明デザインが非常に精巧であると同時に叙情的でもある所以です。

その形から「手榴弾」とも称される「A110 ペンダント」は、1952年にアアルトがフィンランド技術協会のプロジェクトのためにデザインしたものであり、アアルトの代表的な建築の一つであるセイナツツァロ役場(※5)の会議室でも使用されていました。アアルトがデザインをした他の照明にも見られる特徴として、穴をあけた真鍮のリングをランプシェードの下に取り付けています。下に向けて開口部を設け、細かく刻まれたリングの穴より光を拡散させることにより、まぶしさを軽減し、さらに穴から放たれる光は輪となって輝きます。

フィンランドが独立してから100周年を迎える2017年、通常の白と黒の色展開に加え、「ミッドナイトブルー」が数量限定で復刻。60年以上の月日を経てもなお、その洗練されたフォルムと優しい光は色褪せることがありません。





「手榴弾」という愛称で親しまれている「A110 ペンダント」。まぶしさが最小限に抑えられるよう計算されたデザインには、使う人のことを考慮したアプローチを感じることができます。



1945年、事務所で仕事をするアルヴァ・アアルト。当時、アアルトは1936年に妻アイノと共に建てたヘルシンキの自宅の一部を事務所として利用していました。



# Alvar Aalto's "Organic Line"

アルヴァ・アアルトと有機的なライン

## 人間的なモダニズムを表現 建築と家具の歴史に革命を起こした アルヴァ・アアルトの有機的なライン

アルヴァ・アアルト(1898-1976)は最も影響力をもった20世紀の建築家の1人であるとともに、人間性の尊重と解放を目指し、モダニズム思想にヒューマニズムを持ち込んだ先鋭的な考えの持ち主でした。アアルトの哲学は、彼の建築、家具、ガラス製のオブジェに至るまで一貫して、柔らかいカーブを描く「有機的なライン」として表現されています。彼が生み出した有機的なラインとフォルムは、北欧デザインが世界的な認知を得る過程において大きな役割を果たし、後世の建築家やデザイナーに今でも影響を与え続けています。

「建築家の究極の目標は、理想郷を創造することだ」という言葉をアアルトは残しています。デザインするものが、たとえ家であろうと工場であろうと、アアルトが目指したことは変わりませんでした。代表的な作品であるパイミオ サナトリウム(※6)、ヴィープリ図書館(※7)、マイレア邸(アルテックの創業者の1人であるマイレ・グリクセンとその夫ハッリのために設計した個人邸)をはじめ、市庁舎から教会、公営住宅、個人住宅まで、アアルトは幅広い建築物を手掛け、その数は200を超えるほどです。そのどれもが、アアルトならではの有機的なフォルムとともに、人工の建築物の中に

ダイナミックに取り入れた自然と、ぬくもりを感じさせる心地よい素材や光が調和した絶妙な名作として知られています。

建築と家具は相乗的に関係し合うものと考えていたアアルトは、自身が設計した建築に合わせて家具もデザインするようになりました。最初にアアルトがモダン家具のデザインを手掛けたのは、1931-1932年、結核患者の療養所パイミオ サナトリウムの建築、内装を含めたプロジェクトのためでした。この時デザインされた「41 アームチェア パイミオ」とその一連の家具は世界的な注目を集めました。更に、曲げ木の技術を用いて誕生した「スツール 60」などの象徴的な家具により、アアルトは建築の分野だけでなく、プロダクトデザインにおいても、20世紀のデザイン史にその名を刻むことになったのです。1935年のアルテック創業後、アルヴァ・アアルトとその妻アイノ・アアルトが手掛けた革新的なプロダクトは、初めて市場にその姿を現しました。新しい曲げ木の技術や、大量生産を可能にするスタンダード化、その根底にあるアアルトの哲学は、アルテックのものづくりの礎となり、創業から80年以上を経た今なお受け継がれています。





「蜂の巣」という愛称をもつ「A331 ペンダントビーハイブ」。デコラティブな美しいデザインの中にも、アアルトラしい柔らかなフォルムが息づいています。



アルヴァ・アアルトが開発した曲げ木の技術は、「901 ティートロリー」をはじめとする数々の家具にみられる有機的なフォルムを実現可能にしました。





デザインは日々の暮らしを豊かにするもの。アルテックの「ゼブラ」には、そんな思いが込められています。



# Artek's Textiles and Patterns

アルテックのテキスタイル

## 創業当時から現在まで 日々の暮らしを彩る アルテックのテキスタイル

インテリア空間を美しく彩るファブリックは、人々の日常生活をより良いものにしていくための重要な要素である—アルヴァ・アアルトとその妻アイノ・アアルトはそう考えていました。アルテックが創業した1935年、当時はまだ生地を生産する手立てを持ち合わせていませんでしたが、すでにアルテックのマニフェストには、会社の軸となる主要なアイテムの一つとしてテキスタイルが挙げられていました。そのため、建築家でありデザイナー、アルテックの創業者の一人でもあるアイノ・アアルト(1894-1949)(※8)は、アルテックの製品とショップに应用できそうな珍しい生地やモロッコのラグ(※9)などを探し、ヨーロッパの各地を旅してまわりました。彼女が持ち帰ったさまざまな生地の模様は、アルテックにエキゾチックな深みと豊かさをもたらし、新鮮な驚きをもって世界中から注目を集めることになりました。その中でも、時代を越えて愛され、今なお高い知名度を誇っているテキスタイルの一つである「ゼブラ」は、見る人の記憶に残る印象的なデザインと柔らかく心地よい肌触りが特徴です。ゼブラは1935年にアイノ・アアルトが、チューリッヒのスイスを代表する家具店「ヴォーンベダルフ(Wohnbedarf)」で手に入

れたテキスタイルから着想を得たものといわれています。1940年になると、アルテックはカイ・フランクなどのデザイナーと協働をはじめ、彼の手掛けたテキスタイルの中でも「プトキノトコ(Putkinotko)」と「シトルーナ(Sitruuna)」は40年代のアルテックのベストセラーになりました。

1954年、アルテックを象徴するもう一つのファブリック「シエナ」が登場します。アルヴァ・アアルトは、彼が愛してやまなかったイタリアの都市、シエナの建築物をモチーフとしてこのテキスタイルを描きました。シエナはグラフィカルな幾何学模様の規則性の中に手描きならではの揺らぎがあり、整然とした美しさだけではない親しみを感じさせます。シエナは今もなお、アルテックの家具と調和する小物を集めたライン「abc コレクション」としてクッションカバーやキッチン小物などのアイテムに用いられ、日々の暮らしのさまざまな場面を鮮やかに彩ります。



「ゼブラ」の生地はインテリア空間の印象的なアクセントとして「スツール 60」、「400 アームチェア タンク」などさまざまな家具に張ることができます。



アルテックを象徴するテキスタイルの1つである「シエナ」。1954年にアアルトがデザインしたこのテキスタイルは、彼が好んで訪れたイタリアの都市シエナの建築物がモチーフとなっています。



# Notes

## 1. スツール 60

1933年、アルヴァ・アアルトによりデザインされた「スツール 60」。3本脚のスツール60は機能的なデザインの本質が全て詰まったデザインです。堅いパーチ材を曲げて作られたL字形の脚が、円形の座面の裏に直接ネジで固定され、複雑な部品はいっさい必要ありません。らせん状のタワーのようにスタッキングすることができ、コンパクトに収納することができます。発売以来、スツール60は、さまざまな色や仕上げ、ファブリック張りなどのバリエーションが発表され、4本脚の「E60 スツール」を合わせた販売台数は数百万脚にものぼります。デザイン史のなかで最も愛されている名作のひとつとして、今でも世界中で親しまれています。



## 2. 柔軟なスタンダード化

アルヴァ・アアルトは、家具を構成する要素を部品としてスタンダード化することで、部品を組み合わせてテーブル、椅子、スツールなどを自由自在にコーディネートできるシステムを構築しました。アアルトが作り出したコレクションは、テーブルのサイズや高さなど豊富なラインナップを揃えています。さらに、表面の素材やカラーもプロジェクトに合わせてカスタマイズできるなど柔軟性に優れています。スタンダード化と柔軟性、多様性を融合することで、全ての人々が、家庭用、仕事用といった用途に合わせて、好きなサイズや仕様を自由に選択できるようになります。そ

れは、アルテックの製品が時代と文化を越えて愛され続けている理由の一つでもあります。



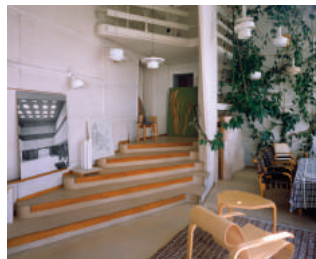
## 3. オフィスチェア

広告やプロモーションを手掛ける企業「Plus-D」のクリエイティブな雰囲気のおフィス。東京にあるこのオフィスでは、オフィスチェアとして「ライバルチェア」が使われています。



## 4. ヘルシンキのスタジオ

自然の光と人工の光、どちらもアルヴァ・アアルトの建築にとって重要な要素でした。アアルトは、1955年に建てられたヘルシンキのスタジオに、照明の実験をするためのスペースを作る程のこだわりようでした。バルコニーから、アシスタントが高さを変えてランプを吊り下げ、その効果をアアルトが確認する、そのような実験を繰り返していたといわれています。



## 5. セイナツツアロ役場

1952年に完成した「セイナツツアロ役場」は、アルヴァ・アアルトの数ある建築の中でも最も重要な作品の一つであるとともに、20世紀の建築史においても特別な建築です。セイナツツアロは、1923年にアアルトが最初の事務所を構えたフィンランドのユバスキュラ市近郊に浮かぶ島です。煉瓦を積んだ城のようなセイナツツアロ役場の建物は、管理事務所、会議室、図書館に加え、集合住宅と商業施設で構成されています。一段高くなった中庭からは、まわりの景色を見渡すことができ、高さやデザインにバリエーションをもたせた有機的なデザインの屋根の効果で、建物はセイナツツアロ島の木々に覆われた環境に違和感なく溶け込んでいます。



## 6. バイミオ サナトリウム

「バイミオ サナトリウム」はアルヴァ・アアルトの初期の建築物のなかで最も代表的な建築です。このプロジェクトの成功によって、彼は、建築家そしてデザイナーとしての国際的な評価を得ることになりました。また結核患者の療養所であったサナトリウムは、人間中心主義のアアルト独自のモダニズムの解釈のきっかけとなった作品でもありました。アルヴァ・アアルトとその妻アイノ・アアルトは、サナトリウムの家具と内装も手掛け、そのデザインの端々から、デザインの美しさだけではなく、結核

患者たちが快適に暮らせるための機能面への配慮をうかがうことができます。



#### 7. ヴィープリ図書館

アルヴァ・アアルト設計による「ヴィープリ図書館」はモダニズム建築の傑作の一つに数えられています。(ヴィープリ市はかつてフィンランド領、現在はロシア・ヴィボルグ市)。一段下がった空間にある閲覧室や、波のようにうねる天井、円筒形の天窓など、アアルトは様々な手法を試していました。それらはいずれも、後にアアルト建築の特徴となるデザインばかりでした。またヴィープリ図書館では、「L-レッグ」を部品として用いた「スツール 60」などの家具システムも登場しました。



#### 8. アイノ・アアルト

建築家アイノ・アアルト(旧姓マルシオ、1894-1949)はアルテックの創業者の1人であり、25年にわたってアルヴァ・アアルトを身近で支えたパートナーでした。ふたりはアルヴァ・アアルト オフィスの建築プロジェクトに対等な立場で携わり、レストラン サヴォイ(1937年)やマイレア邸(1939年)の内装もアイノが手掛けています。また彼女は、展覧会、家具、ガラス製品の

デザインといった彼女自身のプロジェクトにも積極的に取り組み、ガラス製品ではミラノトリエンナーレの金賞を受賞しています。アイノ・アアルトは1935年からアルテックのアートディレクター、1942年から没年までは社長を務めています



#### 9. モロッコのラグ

モロッコのラグは、創業時よりアルテックにおいて重要な役割を果たしてきました。1936年10月にヘルシンキの直営店で開催された最初の展覧会の中心としてディスプレイされ、以来、店舗内に常に飾られていました。マイレア邸をはじめ、アアルト オフィスが手掛けた内装にも、しばしばモロッコのラグが使われています。アイノ・アアルトの旅の日記とスケッチには、彼女がこれらのラグを最初に見つけたのは、1935年4月にアルヴァ・アアルトと共にオランダ、スイス、ドイツを旅した時のことだったと記されています。旅の途中、彼女はアムステルダムの百貨店「Metz & Co.」や、チューリッヒのスイスを代表する家具店「ヴォーンベダルフ(Wohnbedarf)」など、時代を牽引する店にたびたび足を運んでいました。



**artek**

東京オフィス  
〒151-0051  
東京都渋谷区  
東京都渋谷区千駄ヶ谷3-59-4  
クレストコート原宿101  
info.jp@artek.fi

Facebook@Artek Japan  
Twitter@Artek Japan

ヘルシンキ - 本社  
Artek oy ab  
Lönnrotinkatu 7  
00120 Helsinki  
Finland

本リーフレットに掲載されている商品は各販売店でご購入頂けます。  
(入荷状況は店舗により異なります)  
詳しくはWeb Siteをご覧ください。  
<http://www.artek.fi/contacts/di/Japan>

Art Direction: Something Fantastic  
Texts: Pilar Viladas  
Copyediting: Jenna Krumminga

Image Credits  
P. 10 Kalmio  
P. 18  
1. Tuomas Uusheimo  
2. Schaepman & Habets  
3. Nacas & Partners Inc.  
4-5. Alvar Aalto Museum  
6-9. Artek archive  
All other images by Zara Pfeifer

3 / 2017

アルテックは1935年、アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、マイレ・グリクセン、ニルス=グスタフ・ハールの4人の若者により「家具を販売するだけではなく、展示会や啓蒙活動によってモダニズム文化を促進すること」を目的に、ヘルシンキで設立されました。今日、アルテックのコレクションは、フィンランドの巨匠たち、そしてグローバルに活躍する建築家やデザイナーによる家具や照明器具、ホームアクセサリーが揃っています。才気あふれるクリエイターの独創的なビジョンを、斬新なテクノロジーを使って明快な表現へとまとめあげることこそ、アルテックのものづくりの真髄なのです。創業者の精神を受け継ぎ、アルテックは今日でもデザイン、アート、建築の交点に立ち、未来への道を切り開き続けています。

**artek.fi**